地域に笑顔を届けて20余年

祝 第250回記念 念々寄席 開催される

250余人が身も心もほっかほかに

船橋市 大念寺

先月15日、記念すべき第250回「念々寄席」が有名落語家を招いて開催された。主催は船橋市馬込沢の浄土宗の寺、大念寺（大島祥明住職）。20余年もの間、毎月欠かさず開かれ、全国的にも有名な地域寄席だ。昨年3月の震災の際も、会場である同寺本堂や隣接の霊園はびくともせず、その後の不安定な情勢にもかかわらず、変わらず寄席は継続されてきた。

大物が育つ！ 大念寺の伝統

「気付いたら250回を迎えていた。大げさなことは好きではない。通過点なので、今後も淡々と続けていきたい」と穏やかに話す主催の大島祥明住職だが、喜びは隠せない様子。住職の実家は大坂城代の墓所で有名寺院「大念寺」。

同寺では戦後、寄席の会場が無くて困っていた上方の落語家たちに高座を提供してきたという歴史がある。後の人間国宝、桂米朝や桂春団治、桂文枝などの修業時代だ。高座を借りた出演者はみな出世する。大物落語家の登竜門としての伝統がある。

前列中央が寄席を主催する大島住職。前列左から朝呂久、菊之丞、住職、正楽、三三。後列はリーベフラウの面々。

心も身体も温まって

当日、寺のエントランスは早くから開演を待ちわびる人々の熱気で包まれた。オープニングは女声アンサンブル、リーベ・フラウの4人。念々寄席に出演するようになって14年。四季を大切に華やかな楽曲を心がけているとか。

会場がさわやかな空気に包まれた所に前座の春風亭朝呂久さんが元気一杯に登場し会場を沸かせた。続いて人気実力共に急上昇の花形落語家、柳家三三師匠。寺が新しくなってから初めての登壇とのこと。「以前は仏様にお尻を向けて高座に上がりましたが、今度はお顔を拝顔しながらの高座なので安心してオナラができます」とマクラで会場は大爆笑。お題は「長屋の花見」で、貧乏長屋の愉快な花見を再現。

仲入りにはロビーで同寺からお茶とお菓子が振る舞われるが、これも恒例で、参加者らの楽しみの一つになっている。一般の寄席では味わえない温かな雰囲気が漂う。

そして、いよいよ本日の特別ゲスト、紙切り名人林家正楽師匠が登場。来場者も運が良ければ作品を持ち帰ることが出来るとあって、「待ってました！」とばかりに会場から次々に「スカイツリー」「弁慶」などのリクエストが飛ぶ。正楽師匠は独特のスタイルで体をゆらしながら来場者からの注文に飄々と応えていく。あっという間に出来上がった作品に「ほー」と感嘆の声が湧きあがった。

「おかげさま」

トリを務めるのは、二つ目の頃から念々寄席に出演して芸を磨いた古今亭菊之丞師匠。今や超人気、売れっ子の花形落語家でテレビやラジオでも大活躍だ。お題は「幾代餅」。古今亭一門の廓噺の代表作で、花魁と奉公人の幸せな結末に会場は、ほのぼのと幸せな気分に包まれた。

第250回に寄せて菊之丞師匠は「長きにわたって続けられている事は本当に素晴らしい事。ご住職様を始め、来場のお客様、裏方の方々、ひとえに皆様のお力です。そのご期待にこたえるためにも、日々精進して皆様に少しでも良い芸を見ていただきたい。次は300回を目指して頑張ります」と思いを語った。

来場者数は会場からあふれるほどの250人余り。八千代市の川畑満（69）、波江（69）夫妻は、「本当に楽しかった。素晴らしかった。もちろん来月も来場予定です」と感無量の様子。観客らの笑いの後の表情は生き生きとして、実に幸せそのものだ。

同寺の好意で準備された記念の品も配られ、来場者は大喜び。地域に親しまれ、愛される念々寄席は、これからも益々人気を博していくだろう。今月は19日（木）18時から。アクセスは4頁「和みの郷霊園」地図参照。木戸銭300円は20余年変わっていない。

▽問い合わせ☎047～439～6547（大念寺）